

## 特集 地域文化新時代 文化のまちづくり

巻頭言 ● 8 地域からの文化発信―無名塾の活動にみる地域文化  
座談会 ● 10 地域文化新時代  
◇田原孝 松浦幸雄 / 平田オリザ / 中村信夫 / 永井多恵子 / 岡倉 竹本廣文

論文 ● 20 文化のまちづくりのマネージメントとは  
◇衛 紀生

随想 ● 24 地域文化新時代 ◇章刈津三  
エッセイ ● 28 変化の予感 ◇松本 修

● 30 地域文化と共鳴するバレエ ◇牧 阿佐美

事例紹介 ① ● 32 演劇は人と人を結ぶアート ◇PPP実行委員会

事例紹介 ② ● 34 伝統芸術と現代芸術が融合した文化のまちづくり  
◇山形県庄内地方拠点都市地域

事例紹介 ③ ● 36 挑戦する勇氣あげます!! ◇新潟県小出郷文化会館

事例紹介 ④ ● 38 スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールド ◇富山県福野町

事例紹介 ⑤ ● 40 二一世紀への新価値づくり  
山里の美学を世界へ―臥龍桜日本画大賞展◇岐阜県宮村

解説 1 ● 42 「芸術情報フラザ」の活動内容 ◇芸術情報フラザ

解説 2 ● 44 地域文化の振興について ◇文化庁文化部長 地域文化振興課

### 特別記事 二一世紀に向けた介護関係人材育成の在り方

● 48 これからの高齢社会を支える介護関係人材の育成  
C・A・R・E・プラン'97の持し意義について ◇鈴木章夫

● 50 二一世紀に向けた介護関係人材育成の在り方について ◇高等教育局医学教育課

● 52 育成段階における医療と福祉の連携の推進 ◇川崎医療福祉大学

● 53 福祉社会システム専攻という夜間大学院  
◇東洋大学大学院社会学部研究科

● 54 高齢社会における介護関係施設入材  
◇厚生省社会・援護局施設入材課

● 55 福祉サービス現場からの期待する医療系人材  
二一世紀医学・医療懇談会第二次報告を読んで ◇橋本正明

◇神奈川県立平塚ろう学校  
（神奈川県）

4 天然記念物歳時記

◇トラフダケ自生地（岡山県）

本谷のトラフダケ自生地（岡山県）

表2 名作シリーズ ◇打薬扁壺

表3 文化財紹介 ◇郡上踊

6 であいふれあい ◇平尾誠二

57 鑑賞席◇ものがたりの森  
子どものための美術展

◇開館一〇周年記念展  
国立国際美術館の二〇年

58 焦点―文教施策

63 中教審ニュース

70 家庭教育のための取組  
◇家庭教育への理解を深めるために

72 都道府県発―教育学術文化スポーツニュース

◇北海道東川町 ◇千葉県 ◇滋賀県

◇鳥取県

74 びんを講座 こんな講座―大学の公開講座から

◇東京農工大学 ◇沖縄大学

76 現代スポーツあれこれ

◇競技力向上を促す強化キャンプについて

行ってみようやってみよう

80 国立インビッド記念青少年総合センター

海外教育ニュース

82 文学のふるさと ◇田舎教師

84 編集後記

座談会

# 地域文化新時代

## 文化のまちづくり

出席者 (敬称略・発音順)

松浦幸雄 ●高崎市長

平田オリザ ●演出家、劇作家

中村信夫 ●美術評論家、現代美術センター・CCA 北九州ディレクター

永井多恵子 ●世田谷文化生活情報センター館長、日本放送協会解説委員

司会

竹本廣文 ●文化庁文化部地域文化振興課長



●竹本 本日はお忙しい中、お集まりいただきまして誠にありがとうございます。現在、国民の文化に対する関心が高まる中、各地域において地域住民の中から個性豊かな芸術文化を育て発信していくという気運が、かなりの盛り上がりを見せております。本日の座談会では、地域に根ざした特色ある芸術文化の振興ということについて、「地域文化新時代―文化のまちづくり」というテーマで各方面で先進的な活動を展開されている皆様方からの幅広い御意見を伺わせていただきたいと思います。

まず最初に、皆様方の活動についての御紹介をお願いします。

### 地域における様々な取組

●松浦 高崎は、江戸時代には商業的な活動が大変盛んな町で、その時代から文化的な素地があったのだと思います。群馬交響楽団は、もともと終戦前からあったマンドリンクラブなどの音楽愛好家が集まり、終戦の年に高崎市民オーケストラを作ろうじゃないかというようなことで結成され、翌年には第一回の演奏会が

開かれました。その後、現在の群馬交響楽団に発展しましたが、群馬交響楽団は、NHK交響楽団に次いで日本で二番目にプロのオーケストラになりました。昭和二七年には今井正監督の「ここに泉あり」という映画で取り上げていただき、群馬交響楽団が一躍日本で認知されるようになったわけです。途中、大変な苦労もありましたが、おかげさまで平成六年五月には第一回の海外公演としてチェコのプラハの春の国際音楽祭に招待されました。ちょうどウィーンの芸術週間にも当たり、ウィーンでも演奏させていただきました。また、ブダペストでも演奏させていただきましたというところで、海外の方々にも群馬交響楽団が認知されたのではないかと思います。

結局、地域における文化活動をさせていただいて一番感じることは、地域にすぐそれを還元しなくてはいけないということばかりでなくて、やはり他流試合としか他の地域に行つて演奏をして、そこで新しい息吹を感じてくることも大切で、それが技術の向上につながり、結果的に全国的にも認知されるようになってくるのではないのでしょうか。大いに他流

試合をしなくてはいけないんだというふうに感じておりました、私もそうしたプロデュース的なことをだいたいやっております。

●平田 僕には劇場の支配人、フェスティバル・ディレクターという立場と、実際の演出家、劇作家という立場があります。そもそも劇場を東京の駒場という所でやっておりました、そこは稽古場も一緒にあって泊まれるようになっていました。その話を聞きつけた地方の劇団から、泊まりがけで東京公演をやりたいという問い合わせがけっこう来ていたんですね。それでいくつかの公演は実現しましたが、バラバラに来ていただいてもバックアップのしようがないので、まとめて来てもらったらどうだろうかということで、平成元年からそういうフェスティバルを企画しました。

そういう中でいくつかの劇団と非常に親密な交流というか、単に劇場を使っていたといたくという以上の、僕と地域の劇団との芸術家同士としての交流が生まれてきました、そのうちに仙台に来てくださり、弘前に来てくださいななどというお誘い。私の夢はそういう場所を作ることでした。場というのは大きな建物を造るだけではなくて人が集まる場所だと前々から思っておりますので、まず最初にソフトの方を手がけるようにしました。場づくりについて言うと、何か東京に入ってきて東京から地方に行くという錯覚が一般にはありますが、海外の人たちに聞きますと、ヨーロッパなどから東京に来るのも福岡に来るのも北九州に来るのも、彼らにとっては関係ないんですね。結局、その場がどういふ場所なのか、本当に充実した場所なのか。それさえあればどんな場所になっても彼らは来ます。現在、そういう場を作りたいということで北九州で活動しております。

場づくりというのは人づくりだということ、いい人が集まれば必ずその場が生き生きしてくるし、生き生きしてくればその場に必要なのは後からついてくると思っています。

●永井 世田谷文化生活情報センターは、大小二つの劇場と、「生活工房」という生活をテーマにする展示と活動のスペースのある総合文化施設です。この文化の拠点は、七〇万区民にとっては非常に大

いを受けて各地域に行くようになったわけです。そのように全国公演を始めるようになって、一昨年からアーティスト・イン・レジデンスというほどのものではないんですが、地域滞在型で一か月ぐらいい滞在して新作をつくり、まず最初にその地域で作品を発表した後に全国を回っていくという活動を始めました。実は、今も富山県利賀村に一月ほど滞在して作品をつくっているところです。

基本的な出発点は、一番いい環境で一番いい作品をつくれる場所に行くことですね。それがもはや東京ではないということが芸術家の側としての出発点です。ただ、もちろんそのことによつて、その地域の方たちに何らかのものを残せばよいと思いますし、そのため滞在中にワークショップや市民向けの講座などを積極的にやるようにしています。芸術家としていい作品をつくりたいという単純な欲求と、住民にどうやってそういうものを還元していくかということが、これから難しくなっていくだろうと自分でも思っています。

●中村 私は一〇年ほど前、地元の商工基金額の投資であったわけですが、それがまずタックスペイヤー自身のものであるということを感じてもらうために努力をしています。

まず、オープニングにはいわゆるこけら落としというものをやりますが、ここでは野村萬斎さんに「三番叟」をお願いしました。この施設は演劇と舞踊と時には音楽が中心というコンセプトですので、演劇の伝統的な形である狂言にしたわけ

です。それと市民参加ということで、地域活動をしている区民、各世代の男性、女性に舞台に上がってもらい、また地域交流として沖縄県の宮古島の平良市から伝統芸能、熊本市からサンパのおてもやんに参加してもらいました。これは結果的に非常に好評でした。いきなりプロベースのものをやりますと、自分たちの生活から遠いところでスタートするんじゃないかというように危惧があったわけですが、それを払拭することができたのではないかと思います。

オープニングをどのようにするかという点では、劇場の専門家だけでなく、運営財団のいわゆる管理課の職員も含め

会議所の招待で北九州市に講演に行き、美術館やアーティストというのはこうあるべきではないかという話をさせていただきました。そのときに商工会議所の皆さんから、我々は毎年お祭り騒ぎのために走り回ってお金を集めるけれども、いったいこれが自分たちのまちの文化の蓄積になっていくのだろうか、という話が出ましてね。それではひとつ我々の世代から次の世代まで続けられるような文化のまちづくり的なものをみんなで作りたい、という話を僕の方から提案しました。私の専門は美術ですので、美術の分野でつくりたいということでスタートしました。彼らはまちおこしをしたい、私は専門的なことだけしか話さない、その間のギャップというのはすごいものがありました。ただ、月一回私が北九州市に行きました。ただ、現代美術というのはこういうものだと、現代美術というものはこういふものだと、話を皆さんに話すんですね。話せば話すほど皆さんが理解をしてくれて、平成九年四月から現代美術専門の公的学習・研究機関である「現代美術センター・CCA北九州」が開設されることになったということなんです。



●松浦幸雄氏

地域における文化活動は、その地域にすぐ還元しなくてはならないものばかりではなく、いわゆる他流試合とか他の地域に行って活動を行い、そこで新しい息吹を感じることが技術の向上につながるわけで、そのような活動により全国的に認知されるようになるのではないだろうか。

て考えました。劇場関係とそれから生活工房には、デザイナーなどの専門職を配置しましたが、区民のことについては区役所から派遣されている職員が一番よく知っているわけです。世田谷は専門家の採用では知られていますが、そのプランが住民からかけ離れてしまっただけならならぬと思います。やはり地元の方の支持を受けながら、プロの作るものがどれだけの感動と共感をもって迎えらるか、みんなのものになるのかというところが一つのポイントだという感じがしております。

### 地域文化の振興にとって重要なこと

● 竹本 どうもありがとうございます。それぞれに各地域において活躍されている方々から、御経験を中心に語っていただきました。今のお話を踏まえて、地域文化の振興のためには何が重要なのかについて御発言をお願いします。

● 永井 高崎の場合にすばらしいと思うのは、オーケストラの演奏所としての音楽センターの建設がまず市民の寄付からのような流れを行政が後から少しサポートするというのが、一番長続きするコツといったら変ですが、結果的にそういうことになっているんじゃないかというお話ですね。

文化庁としても、平成八年度から「文化のまちづくり事業」という事業を行っております。これは、地域の住民の方が行おうとしている文化事業に対して支援する形で、市町村あるいは都道府県等とともに行うものとして始めました。また、平成九年度からは、「アーティスト・イン・レジデンス事業」といって、国内外の芸術家がある地域に滞在し、創作活動を行っていただくことよって地域住民との相互交流や芸術家同士の相互交流の中で新たな芸術的潮流をはぐくんでもらおうといった事業も始めているところですね。

次に、地域文化の基盤といえますが、地域文化を支えるものについてお話しただきたいと思えます。

### 地域文化を支える人材の育成

● 松浦 地域文化もプランナーがいなけ

始まったんですね。

● 松浦 そうです。音楽センターは、市の予算が八億円、ときに三億三〇〇万円で作りました。そのうち約一億円は市民の浄財で作ったんですね。そのほかは企業の特別募金とかですね。

● 中村 それを継続しているというのはすごいですね。継続するということがすごく大切ですね。美術の世界、特に現代美術系だとヨーロッパでそういう例がみられます。オランダにアイトホールペンという小さな町があり、世界的に有名なんですが、なぜ有名かというと、やはり二〇年ぐらいすごい活動を行ってきており、また、とてもいいコレクションをしているんです。ですからどこに行ってもどんな場所でも、やはり少しずつ蓄積していったものがありますと、必ずどこかで認められてくると思います。実際には徐々にいろいろなと思わせていくというのですか、思ってくれるようになったときには動いていくものだなあとと思うと同時に、その間本間に時間がかかるものだなあと思えますね。

● 永井 最近、文化のまちづくりの論議ははいけないと思うのです。行政の中にもそういうプランナーを置かなくてはならない。どうも今まで地方公共団体はこのようなことをやってこなかったのです。今その必要性を感じて若い人たちを採用するようになっておりますが、まだそこまで育ってこないという感じがしております。

政令指定都市以外では高崎は早い方だと思えますが、文化課を独立させてそこで行政のプランナーを養成しようと、いろいろなことをやっております。希望者を募ってそこへ配属するようにしているのです。

● 永井 劇場ということで言いますと、いわゆるマネージメントも含めて資金を獲得してくれる人ももちろん必要ですし、照明や音響や舞台機構などの分野での人材がもう危機的状況だと思えますね。これも建物優先で人の養成が遅れたということの典型的な例ですが、ぜひともそういう技術面の人材を養成していただきたいものです。いまハードの機構がものすごく進歩しているのです。それと人材の不足、その溝を埋めていただくということが緊急の課題なんです。机上の

が盛んですが、文化によるまちおこしなのか、文化そのものを大事にするのか、そのへんの意味合いの違いがありますね。まちが元気になるといって、文化が盛んになるといって、もちろん双方の微妙なバランスのもとに文化はあるのだとは思いますが、一時的なイベントとは違う、ということだと思います。

● 松浦 高崎市はいま平成一二年までの第三次総合計画に基づき各種の施策を実施していますが、その基調をなすのは文化だと位置づけしております。高崎の場合には先ほど申し上げたような群馬交響楽団の活動の中にもありますように、民間の方たちが前面に出た文化活動がずいぶん盛んに行われており、そういうことで大変恵まれていると思います。民間の方たちが地域文化をリードするといいますが、行政はまちのそうした気運をリードしていく形でちよつと後ろに控えております。

● 竹本 特色ある文化が地域に根付くためには、住民を中心とした文化活動が一度性のもので終わるのではなく、長く次の時代に受け継がれて継続するということが必要だということになりますね。そ

### ● 平田オリザ氏

芸術というのは精神の運動なので、誇りを持つということが大事だと考えています。だから僕たちは、地域の人々にとって精神の糧としてのなくてはならない存在になりたいと思います。地域の人々が自分たちの地域の文化や地域に誇りを持つことは、とても大事なことで、常々思っております。



学習も必要ですが、特に施設へのインテン制度があると有効だと思うのです。

●竹本 地域文化を担う人材が地域文化を支える一つの要素でもありますね。確かに多くの文化会館ができる一方で、音響とか照明とかの専門家の人が急にはそんなに養成できるわけではないですから、文化庁でも音響とか照明、文化会館の担当の方を集めて研修会などを行っております。また、インテンについては、送り出す側が人件費等を負担するのであれば受け入れる文化施設は多いと思いますね。

### 芸術文化と地域との関係

●中村 地元との関係をどのようにしていこうかということは、すごく難しいと思います。例えばプロがより自分たちのものを強く出せば出すほど地元の人たちには分かりにくくなってきますよね。どういう形で地元の人たちとのつながりを作っていくかということが一番難しいと思います。

●永井 世田谷文化生活情報センターはことだと思っんですね。これからの日本の芸術家にとっては非常に大事なことで、私たちはあなた方にとってかけがえのない存在ですよと、きちんと胸を張れるかどうかということが重要だと思います。

### 学校教育との連携

●永井 公共劇場というのは、一つの社会教育施設だと思うんですね。子供たちのためにもっと活用してくださるよう学校の先生方の御理解が必要だと思います。小さいうちから芝居を観たり絵をかいたりということが身に付いていないと、やはり文化というのはいつまでたっても経済のための文化のままではないでしょうか。

アマチュアの方々の活動を見ていて思うことは、バレエや合唱やピアノは、教育がある水準に達しているわけです。学校や、ほかにも習うところがありますが、演劇の場合、きちんとした教育課程やレッスン場がないので水準的に難しいものがあります。

●平田 プロの側としても、教える専門の人がもっと演劇の場合にもいてくれれば

渋谷から東急新玉川線で二つ目の三軒茶屋にあり、三軒茶屋には昔から三茶祭りというのがあるのですが、お祭りの中にアートといえますか、芸術活動、文化活動をどう持ち込むか、あるいは訓練していくか、プランニングに時間をかけてやっているところです。我々の場合、周りにたくさんのお店街があり、それが利点になっています。商店街の人たちと交流しながら、何か新しい地域の文化、一都市文化が生まれたいと思っています。

●平田 平成七年夏には沖縄県与那国町の招きで与那国島に行きました。我々はアーティスト・イン・レジデンスとして何か助成金のようなものを受けるといっても、施設の提供を受けることが多く、与那国でも宿泊所と稽古場として体育館を借りたわけです。うちの劇団は、文化庁のアーツプラン21で国から助成金を受けているわけですが、東京で活動している、近所の方はそのことを御存知ない。かえって与那国島の住民の方が、僕たちが助成金で活動していることを御存知である。その市民社会の視線を受けて活動するということは芸術家にとっても大事な

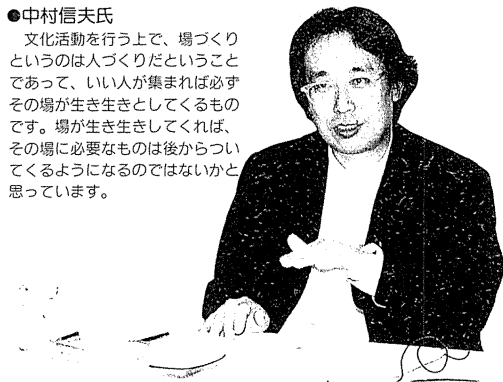
はいいと思うのですが、芸術大学にも演劇科はないです。現在、地域の大学では芸術コースで演劇とか身体表現を入れたいという声はしぶん出てきているみたいですね。そういうものが少しずつできてくると、ずいぶん日本全体の状況も変わってくるのではないかと思います。

●松浦 高崎市も四年前に高崎経済大学の附属高等学校を作りまして、そこには芸術コースというのがありますが、やはり演劇はないですよ。ぜひそういうものを作った方がいいんだということを感じますね。

●永井 表現みたいなことが小学校や中学校の教育課程に入ってくれば、そこで演劇は職業として成り立つんですね。演劇というのは、ものを深く考えることや、また、人との関係性を養うことに適しています。頭だけで考えるのではなくて全体で表現すると、嘘をつく人はすぐ分かります。人間全体がみえてしまうのです。演劇というのは、人格形成にかなりことができますし、それこそ音楽も美術も含んだ総合芸術でもあるわけですから、とてもいい教育の手段だと思います。

#### ●中村信夫氏

文化活動を行う上で、場づくりというのは人づくりだということであって、いい人が集まれば必ずその場が生き生きとしてくるものです。場が生き生きしてくれば、その場に必要なのは後からついてくるようになるのではないかと思っています。



#### ●永井多恵子氏

最近、文化のまちづくりの論議が盛んですが、文化によるまちおこしなのか、文化そのものを大事にするのか、そのへんの意味合いの違いがありますね。まちが元気になるということと、文化が盛んになるということ。もちろん双方の微妙なバランスのもとに文化はあるのだとは思いますが、一時的なイベントとは違う、ということだと思います。



また、閉じこもった心を開くこともでき  
る。表現したいというのは人間の根源的  
な欲求ではないでしょうか。

●平田 僕はワークシヨップを行う回数  
が多くて、昨年度は一〇〇回以上ワーク  
シヨップをやりました。ワークシヨップ  
を受けた高校生は、アンケートにこのシ  
ーンがよかったとか、この俳優がよかつ  
たとか、いろんな感想を書いてくれるん  
です。逆に受けていない子供たちは、こ  
の芝居のテーマは何ですかとか、作者の  
言いたいことがわかりませんかとか、そん  
な反応が多い。演劇の見方がいわゆる国  
語教育の主題を見つけるといふところだ  
けになり、非常に狭くなってしまう。演  
劇の鑑賞教育も受けていないですし、も  
ちろん演劇の表現の教育も受けていない  
わけですから、いきなり現代演劇を理解  
しろといふても無理だと思えます。直感  
的に理解する子供もいるでしょうけれど  
も、現代演劇はそれほど単純なものでは  
ないので、やっぱりプロセスが必要だと  
思いますね。

●竹本 これはまさに個人的な意見なん  
ですけれども、どうも学校教育というの  
動なので、誇りを持つということが大事  
だと思っております。そこへの入口は何で  
あつてもよく、むらおこしでも何でもい  
いと思えます。ただやはり最終的には芸  
術の公共性ということですね。人々の生  
活になくはならないもの。だから僕た  
ちは、村民なり町民なりにとって精神の  
糧としてのなくてはならない存在、例え  
ば教育や医療と同じように、なくてはな  
らない存在になりたいと思えます。その  
道のりは遠いですが、芸術も含めた地域  
文化に誇りを持ってもらえるようになる  
と一番いいなと思うんですね。そして最  
終的に自分たちが住んでいる地域に誇り  
を持つということは、すごく大事なこと  
だと僕は常々思っています。

また、誇りを持つ範囲というのがや  
はりあると思うんですね。東京で暮らし  
ていると全然感じませんが、文化とい  
うのは本当に生活と密着していますから、  
日本人という範囲で誇りを持ちたりす  
ることよりも、僕は例えば高崎市民とし  
て誇りを持ったほうがいいのではないで  
しょうか。

●中村 そうですね。我々も海外のアー  
ティストを呼ぶときに、いままでは、イ

は学校の中だけで完結させてしまうとい  
う傾向がありますね。そうではなくて、  
例えば芸術関係の科目は鑑賞と表現とに  
分かれているんですが、せめて鑑賞部分  
は学校の中でレコードを聴かせたり、教  
科書か何かの写真を見せるのではなく、  
美術館や劇場に直接行かせる。学校自体  
にそういった柔軟性が求められる時代に  
なってきたのではないかと気が  
します。

### これからの地域文化

●竹本 最後にこれからの地域文化につ  
いて御意見がありましたらお願いします。

●平田 利賀村の村長さんがよくおっし  
やっていることですが、利賀村は過疎の  
村で富山市あるいは高岡市に子供たちは  
出ていくわけです。かつては利賀村の出  
身だということを人に話せなかったと言  
うんですね。しかし、今利賀村は、富山  
県で一番国際的な村ですから、利賀村出  
身だと胸を張って言えるようになったと  
いいます。僕はそれはすごく大事なこと  
だと思えます。芸術というのは精神の運  
ギリスのアーティスト、フランスのアー  
ティスト、韓国のアーティストというよ  
うに国の名前を付けて呼んでいました。  
これからは、全部町の名前を付けてい  
こうと思っています。どこの出身というの  
も町の名前で出す。そのぐらいの範囲で  
話したほうがよいと思えます。

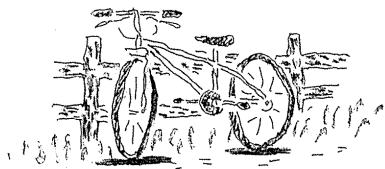
もはや国によって文化を区切ることが  
できない状態になってきています。例え  
ば日本には日本独自の美術の考え方があ  
りますが、今はそういう時代ではないと  
思いますね。世界がすべて一緒に動いて  
いるわけで、いまや一時間半でヨーロ  
ッパまで行くことができるし、地球の裏  
側にも一三時間で行くことができるん  
です。情報は東京辺りだとあふれており、  
昨日ニューヨークで起きた出来事は、小  
さな出来事でもすべて情報が伝わってき  
ており、そういう時代に日本の独自の何  
かという問題ではないのです。確かに伝  
統も非常に大事ですからそれは考えなく  
てはいけません。しかし、文化は一つの国  
だけで動いているわけではなく、世界全  
体で動いているということを、我々は感  
じなくてはいけないと思っております。

●竹本廣文地域文化振興課長



誇り、あるいはその地域に住んでいてよ  
かったというようなものを地域住民にも  
たらずものだと思います。現在、文化庁  
では文化振興マスタープランという文化  
振興に関する基本方針を作ろうとしてお  
りまして、今後も皆様方のお知恵を拝借  
しながら、芸術文化は世の中になくは  
ならないものという認識が広まるよう、  
また、地域から世界に向けて文化発信が  
できるよう基盤整備に努力したいと思っ  
ております。

本日は、お忙しいところをどうもあり  
がとうございました。



# 特集 ● 青少年の 野外教育の推進

●巻頭言  
野外教育のすすめ——三浦雄一郎

●座談会

生きる力を  
はぐくむ野外教育

(出席者)五十川隆夫／杉原正  
高梨房子／高野孝子／(司会)尾山眞之助

●提言

後藤康男／阿部 治  
佐藤初雄／土井浩信

●事例紹介——山口県教育委員会ほか

●文部時報7月臨時増刊号

●二一世紀を展望した我が国の教育の在り方について

中央教育審議会第二次答申

7月下旬刊行予定

▽人々が心の豊かさを求める時代となり、文化に対する関心も極めて高くなっています。各地域においても、美術館や文化会館などの建設が進み、地方においても優れた芸術文化に巡り逢える機会が多くなっていることは大変有り難いことだと思います。反面、運営などソフト面ではまだまだ課題も多いようです。このような中で今月号の特集は「地域文化新時代」文化のまちづくり」を取り上げました。

現状や課題の分析、今後の地域文化の在り方について、先進的な活動事例を取り上げながら分かりやすく紹介し

ています。今後、より一層地域において個性豊かな文化の振興が図られよう、読者の皆様方とともに期待したいと思います。

▽今年度の新企画「家庭教育のための取組」や「行ってみようやってみよう」はいかがでしょうか。御意見・御感想をお寄せください。お待ちしております。(T・K)

●訂正 平成九年五月号二四頁「事例紹介」観点大学方式等によるアジア諸国との学術国際交流についての記載中、上段「五行目」九か国「一五機関」は、「〇〇か国」六機関に訂正し、中段五行目「フイレン」科学技術省(昭和五四年)の後に、「韓国科学財団(昭和五四年)」を追加します。

### 投稿歓迎

「読者からのたより」欄への投稿、「文部時報読者アンケート」を歓迎します。本誌を読んだ感想、御意見等をお寄せください。

●「読者からのたより」投稿規定

①1件につき400字以内 ②住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記(誌上匿名可) ③掲載分には薄謝進呈

※文章を一部手直しさせていただくことがあります。送り先 〒100 東京都千代田区霞が関3-2-2

文部省大臣官房政策課「文部時報」編集部

※電子メールでも受け付けております。

宛先名「jiho@monbu.go.jp」

●「文部時報読者アンケート」

文部時報読者アンケートは添付のはがきのほかに電子メールでも受け付けております。

宛先名「jiho@monbu.go.jp」

### コンピュータネットワークを利用した文教行政の広報

文部省では、我が国の文教施策等を広く皆様にご紹介するため、インターネット等を利用して情報を提供しています。

インターネットアドレス:

<http://www.monbu.go.jp/>(半角入力)

パソコン通信:

GO コマンド(Nifty-Serve) } MONBUSHO  
Jコマンド(PC-VAN)

なお、パソコン通信による情報提供は、国立教育会館の協力を得て実施しています。

●著作権所有——文部省◎

●発行所——株式会社 きょうせい

本社 〒104 東京都中央区銀座7-4-12

本部 〒167-88 東京都杉並区荻窪4-30-16

電話 03-5349-6666(営業部) 振替口座 00190-0-161

●印刷所——株式会社行政学会印刷所

平成9年6月10日印刷  
平成9年6月10日発行

定価610円(本体581円)(¥84円)

年間購読料7,320円

・ただし、増大号、臨時号の場合は別に代金を申し受けます。  
・なお、購読のお申し込みは直接営業所またはほとんどの書店にてお願いいたします。

●本誌の掲載のうち、意見にわたる部分については、それぞれ筆者個人の見解であることをお断りいたします。